

滋賀県湖北方言の *-tar-* の性質と機能

—有生性の共起制限とアスペクト—^{1*}

脇坂美和子

【要旨】 本稿は、滋賀県湖北方言のアスペクト接辞である *-tar-* の性質と機能を記述し、この接尾辞が

1) 主題となる名詞句との間に、有生性に関わる強い共起制限を持ち、無生物と共起すること

2) 先行する動詞にほとんど制限がなく生産性が高いことから、これを二次的なアスペクト標示とみなすことはできず、この方言のアスペクト体系において重要な役割を果たしていること

を明らかにすることを目的とする。これは、語彙資源である存在動詞の *ar-* の性質を継承するものであり、歴史的には金水 (2006) など²が提示するアスペクト形式の発達過程を裏付けるものである。方言類型論的な観点からは、*-tar-* の付加に伴って他動詞の格体制に変換が生じる現象は佐々木 (2007) などが提示する逆使役構文に該当すると考えられる。

また、この共起制限は、この方言話者の現代日本語共通語 (以下共通語) の使用に干渉し、*-te-ar-* に転移している。このような現象は、話者には意識されにくいものであり、方言話者の共通語形成の過程を観察する上で重要なデータとなり得ることを示す。

【キーワード】 滋賀県湖北方言 有生性 アスペクト 逆使役

1 はじめに

滋賀県湖北方言は、滋賀県を琵琶湖を中心に東西南北に分割した北部、2019年現在の行政区域では、長浜市と米原市のほぼ全域に当たる地域で話されている方言の総称である。近畿地方と北陸地方、中部地方の境界に位置し、京阪方言と、北陸、中部地方の方言が接触するこの地域では、方言アクセントが混在していること (生田 1951, 井之口 1952 ほか) や特徴的な待遇表現 (筧 1962



滋賀県北部
(脇坂 2015 を元に作成)

¹ 本稿は2019年11月16日に名古屋学院大学で行われた日本言語学会第159回大会の予稿集を大幅に加筆修正したものです。発表にあたり有益なコメント、質問をいただいた皆様に感謝申し上げます。

² 坪井 (1976) など

ほか) の存在などが知られている。滋賀県下の他の方言との間に明確な境界を引くことは困難であるが³、湖北方言は滋賀県下においてアクセントの多様性などから「特異な湖北方言」(寛 1962: 170) とみなされてきた経緯があり、待遇表現の使用法、終助詞の使用法 (脇坂 2016a) などの点で県下の他地域とは異なったまとまりを持つ。しかし総合的な文法記述は進んでいない。

本稿では、この方言の文法記述に資することを目的として、アスペクト形式の *-tar-* の記述と分析を行う。*-tar-* を含む湖北方言のアスペクト形式には、主題となる名詞句との間に、名詞句の有生性によって現れ得るアスペクト接辞が異なるという共起制限が見られる。このうち、有生物と共起する *-ter-* (共通語の *-te-(i)-r-* に対応する) などの形式には、有生性の他に人称、待遇、モダリティなどについても複雑な共起制限が見られる (脇坂 2016b) が、これについては別途詳細に論じる必要があるため、本稿では扱わない。ここでは無生物と共起する *-tar-* について記述と分析を行う。

2 節では、*-tar-* の用法を記述し、*-tar-* は、無生物とのみ共起し、先行する動詞に関わる制限については、この有生性の共起制限に伴って生じるものを除いてほとんど見られないことをデータに基づいて示す。その上で、*-tar-* がこの方言のアスペクト形式において、無生物に関しては共通語の *-te-(i)-r-*、*-te-ar-* の双方の機能のほぼ全領域にあたる重要な役割を果たすとともに、通時的には京阪方言などの文法化が進行する以前の性質を残しており、金水 (2006) などが提示するアスペクト形式の発達の過程に裏付けを与えるものであることを論じる。また、*-tar-* の付加に伴って他動詞の格体制に変換が生じる現象はいわゆる逆使役構文 (木部編 2019: 46) に該当すると考えられることを主張する。

3 節では、湖北方言の話者が、この形式に対応する共通語の *-te-ar-* 形式にも有生性の共起制限を適用する傾向が観察されることを報告し、方言から共通語への文法範疇に関わる現象の転移について考察を行う。

4 節で全体のまとめと今後の課題を述べる。

本稿において例文は音素表記とし、促音、撥音、長音はそれぞれ Q, N, R で表記する。-, =, + はそれぞれ接辞境界、接語境界、語幹境界を示す。データは主として 3 件の談話資料から採取しており、収録時間は総計 2 時間 23 分、被調査者は、1921 年から 1936 年生の母語話者男性 5 人、女性 3 人である。これに加えて、必要に応じて同じ話者に対するエリシテーションを行い、同方言の母語話者である筆者 (1967 年生) の作例を追加した。談話資料には、被調査者の符号、生年、性別を付記し、エリシテーションと作例についてはその旨を追記した。

³ 寛 (1962) は東西南北の 4 区画に、松丸 (2018) は甲賀を加えた 5 区画に分割している。

2 湖北方言の *-tar-* 形式の性質と機能

湖北方言の *-tar-* は存在動詞 *ar-* を語彙資源とし、動詞に後続してアスペクトなどを表す接尾辞で /ta/ は通常は短母音で現れる。共通語の *-te-ar-* や、京阪方言の「たーる」(金水 2006)、「タール、ダール、タル、ダル」(中井 2008)(以下、引用を除いて *-taRr-*) に対応する形式である。

共通語の *-te-ar-* 形式は、限られた他動詞にのみ後続し機能も限定的である。益岡・田窪 (1992) は「動作の結果としての対象の状態を表す。対象はガ格で表され、関係する動詞は、(中略) 対象の状態の変化を表現する他動詞である (p.112)」と述べている⁴。

一方、京阪方言の *-taRr-* については、無生物主語の結果状態を表すのに「-てる」「-たーる」両形式が選択可能であるとされ(金水 2006 : 279-80)、「次第に共通語と同じ体系に近づいていくもの(同書 : 281)」という予測が為されている。

以下の小節では、このような共通語や中央部の京阪方言の対応形式とは異なるふるまいを見せる湖北方言の *-tar-* について、必要に応じてこれらと対照しながら記述を行う。

2.1 *-tar-* の共起制限

-tar- は (1) のように主題が無生物である時、動詞に後続して結果相や進行相を表すことができる。しかし主題が (2) のように有生物になると、アスペクト接辞の選択には有生性のほかに人称や待遇関係などの共起制限が加わるため、この文脈では結果相には *-tor-* が選ばれる。(3) のように、馬などの有生物が主題の場合に、アスペクト接辞として *-tar-* が後続することはできない。

- (1) *kisya=ga ki-tar-u=wa*
 汽車=主格 来る-無生.結果相-非過去=断定
 汽車が来ている

⁴ 準備の意味を伴う場合はこの限りではない旨の注釈がある。湖北方言については、主題が有生物であれば、準備の意味の有無に関わらず *-tar-* が用いられる。

(2) uma=ga ki-tor-u=wa

馬＝主格 来る・有生・3人称⁵・下方待遇・結果相・非過去＝断定

馬が来ている

(3) *uma=ga ki-tar-u=wa

馬＝主格 来る・無生・結果相・非過去＝断定

*馬が来である

(1) - (3) (SS-1933 男性 エリシテーション)

本稿に使用した談話資料では、共通語の *-te-ar-*、*-te-(i)-r-* に相当するアスペクト形式 116 件のうち、41 件に *-tar-* 形式が現れ、その全てが無生物の主題と共起している。これは、この有生性についての共起制限を裏付けるものである。例外的な現象については後述する。

2.2 *-tar-* の機能と後続できる動詞のタイプ

本小節では、この方言においては *-tar-* が有生物の主題に関する限り、共通語で *-te-(i)-r-*、*-te-ar-* の双方が担う機能のほぼ全領域にわたって使用されることから、アスペクト接辞として二次的なものと位置付けることは適切ではないことを論じる。

2.2.1 属性 (性質や特徴) を表す *-tar-*

共通語では、*-te-(i)-r-* 形式で属性を表すことがある。たとえば、益岡・田窪 (1992) は「テイル形の表現は、時間的な限定が希薄になると、対象の属性 (性質や特徴) を表す (p.116)」としている。

湖北方言でも、同様に *-te-(i)-r-* に対応する形式で属性を表すことができるが、ここでも有生性の共起制限が働き、無生物に関してはこの機能は *-tar-* が担っている。この方言では、*-tar-* は、共通語の *-te-(i)-r-* が後続しない状態動詞の一部などにも後続して、対象の属性が現存していることを明示的に表す。この性質は、有生物と共起する *-te-(i)-r-* 等についても同様である。(4) - (6) の例は、いずれも対象そのものの属性や内部構成について述べており、なんらかの変化結果に言及しているのではない。

「時間的な限定が希薄になる」以前の、自動詞の変化結果の継続については、2.2.3 で論じる。

⁵ 湖北方言では、アスペクト接辞は名詞句との間に共起制限があり、*-tor-* は 3 人称の有生物を指す名詞句とのみ共起する (脇坂 2016)。以下、グロスに付した人称はこの共起制限を表す。

- (4) *somosomo namae=ga tigo⁶-tar-u*

そもそも 名前=主格 違う-無生.状態-非過去

そもそも名前が違っている (違う)

(WD-1936 男性)

- (5) *sakana=no naka=wa doR naQ-taN-nya=to*

魚=属格 中=主題 どう なる-無生.状態-名詞化.コピュラ=引用

魚の中 (構造) はどうなっているんだと

(YO-1932 男性)

- (6) *hono kaNkaku=ga haQkiri+si-tar-u =sakai*

その 感覚=主格 はっきり+する-無生.状態-非過去 =理由

その感覚がはっきりしているから

(US-1921 男性)

この方言のアスペクト形式には、語彙資源である存在動詞の「有生物の存在」の意味が継承され、金水 (2006) に見られる京阪方言の *-taRr-u* のような文法化が進行する以前の性質が残存していることは、このようにアスペクト的な意味が希薄な、あるいは存在しない場面においても、有生性の共起制限が存在することによっても示されている。なお「似る」「見える」などの状態動詞については、例外的に (7) のように有生物を主題に取ることが可能な場合がある⁷。

- (7) *o+toR+san=ni ni-tar-u=de sugu wakar-u*

丁寧+父+さん=与格 似る-無生.状態-非過去=理由 すぐ わかる-非過去

(この子は) お父さんに似ているのですぐわかる

(作例)

有生物と共起する接辞は、人称や待遇関係等についても名詞句との間にさらに複雑な共起制限があるため、無生物の主題に *-tar-* 以外の待遇関係を表示する接辞が現れる

⁶ *tiga (w)* - のウ音便形は語幹末子音と融合し短母音で現れる。

⁷ 例外的な現象が生じる原因については査読者および口頭発表時 (脇坂 2019) に受けた指摘を踏まえ、別の機会に詳細に分析することとしたい。

ことは、擬人化される場合を除いてほぼ見られない。

2.2.2 結果相、進行相を表す *-tar-*

湖北方言のアスペクト体系は、工藤 (1995) 以降の一連の研究による分類に従えば、(8) - (9) に見られるように、共通語と同様に、結果相と進行相の形式を区別しない、二項対立の体系である。

- (8) age=ga kizami+koNbu=to tai-taV=nya
 油揚=主格 刻み+昆布=共同格 炊く-無生.結果相=名詞化.コピュラ
 油揚が刻み昆布と炊き合わせてあるんだ

(US-1921 男性)

- (9) haR=ga oQ-tar-u
 葉=主格 落ちる-無生.進行相-非過去
 葉が (目の前で) 落ちている

(WD-1936 男性 エリシテーション)

ここでも主題が無生物であれば、進行相にも結果相にもアスペクト接辞は *-tar-* が用いられる。

さらに湖北方言では、主題が無生物である限りは、限界動詞であるか非限界動詞であるかを問わず、*-tar-* が用いられる。(8)、(9) はそれぞれ限界動詞の結果相、限界動詞の進行相 (金水 2006 のいう強進行相) であるが、非限界動詞についても同様に、(10) に見るような非限界動詞の結果相、(11) のような非限界動詞の進行相 (同書のいう弱進行相) のいずれにおいても *-tar-* が現れる。

- (10) makura=ni tuko-taQ-ta
 枕=目的 使う-無生.結果相-過去
 (座布団を) 枕に使っていた (枕として使われていた)

(WD-1936 男性)

(11) hana=ga nio-*tar*-u

花＝主格 匂う-無生.進行相-非過去

花が匂っている

(WD-1936 男性 エリシテーション)

この方言では主題が有生物である場合も、結果相と進行相を区別しない二項対立の体系であることは同様である。しかし、有生物については上述のように人称、待遇関係と名詞句との共起制限や、証拠性、「兆候に基づく直後の運動の完成の推定といったモーダルな意味 (工藤 2014 : 364)」のような派生的な意味の共起制限が、有生性の共起制限とは別にかかり、無生物よりも複雑な体系をなすため詳細については機会を改めたい。

2.2.3 自動詞にも他動詞にも後続する *-tar-*

先に述べたように、共通語の *-te-ar-* とは異なり、湖北方言の *-tar-* は、2.2.1 で見た状態動詞などを含む自動詞にも後続する。(12) は自動詞の状態変化の結果の残存局面について述べるもので、下地 (2018) のいう残存結果相に当たるが、本稿では結果相に含める。このような状態変化が、恒常的であったり初めからその状態であったとみなされるようになると 2.2.1 で見た属性を表す用法になる。

(12) sio=yara haQ⁸-*tar*-u=de

塩＝など 入る-無生.結果相-非過去＝理由

塩なんかが入っているから

(YS-1933 女性)

動詞に自他の対応がある時は、共通語では「蓋が開いている」「私が蓋を開けている」のように、自動詞の結果状態と他動詞の動作の進行を表すのにもともに無標の *-te-(i)-ru* 形式を用いる。「蓋が開けてある」のように、他動詞の対象の結果を表す場合にのみ有標の *-te-ar-u* 形式が使用される。

これに対して、湖北方言では、(13)⁹、(14) の例に見るように、他動詞であれ自動詞であれ、主題が無生物の名詞句である場合には *-tar-u* が無標の形式として使用され

⁸ 査読者より haiQ-*tar*-u の間違いではないかという指摘をいただいているが、この方言では連母音/ai/の促音便形が/aQ/になることがあり、これに該当する。

⁹ (13) は *-tar-* が、この方言の話者においては優勢の短母音ではなく劣勢の長母音で現れている例である。

る。有生の名詞句が他動詞の動作主体として明示されるか、文脈から動作主体が主題であることが明らかな場合にのみ、(15) のように動作主体の有生性と人称、待遇に対応したアスペクト接辞が用いられる。

- (13) tyoito ko+sara=ni tui-taRr-u
 ちよいと 小+皿=場所 付く-無生.結果相-非過去
 (白和えが) ちよいと小皿に付いている

(UY-1922 女性)

- (14) sira+e=ga tyoito ko+sara¹⁰=ni take-tar-u
 白+和え=主格 ちよいと 小+皿=場所 付ける-無生.結果相-非過去
 白和えがちよいと小皿に付けてある

(作例)

- (15) sira+e=o tyoito ko+sara=ni take-te-ru
 白+和え=対格 ちよいと 小+皿=場所 付ける-有生.1.2 人称.結果相-非過去
 (私が)白和えをちよいと小皿に付けている

(作例)

これを自他対応の観点から見ると、-tar- は (13)、(14) のような語彙的な自他対応については、自動詞、他動詞のいずれにも後続できる。(13) は、2.2 で見た性質や特徴を表す例で、この場合は「結婚式の祝いの膳というものはどういう膳組みになっているか」という文脈において、その構成を説明するものである。共通語でいえば -te-(i)-ru の機能に当たるが、付いているのは無生物 (白和え) なのでこの方言では -tar-u が使われる。(14) はこれが他動詞の目的語の指示対象である白和えの状態変化であることを明示するが、これは動詞自体が他動詞であることによるものである。

これに対して、(14) と (15) を見ると、語彙的には双方ともに他動詞であるが、-tar-u が使用されることによって、項の数に変化が見られる。(15) は他動詞の動作主との間に有生性と人称、待遇 (ここでは 1 人称であるため、待遇は中立で標示されない) について共起制限をもつアスペクト接辞が使用され、動作主は明示されていないが、動作主の行為についての言及であることが明らかになっている。ここでは動作主と行為の対象の二つが他動詞の項になる。これに対して (14) では、動作主は斜格で

¹⁰ ここでは連濁はない。筆者の内省では、連濁の有無にゆれがある。

も現れることはなく、(15) に比べて項が一つ減っている。これは、金水 (2006) が近世中期以降の近松作品の「-てある」の例について指摘するものと同様に「構文全体としての主語は他動詞の動作主ではなく、目的語の対象物 (無生物) 」になり「受動文のような格体制の変換が生じている」(金水 2006 : 275) のである。

主題が無生物であれば、(15) のような意思動詞の場合だけでなく (16) のような無意思動詞の場合であっても、同様の変換が生じる。すなわち、*-tar-u* は他動詞において格体制の変換が起こる場合に他動詞が意思性を持つかどうかという点に関しても、動詞のタイプを選ばないといえる。

- (16) *kasa=ga wasure -tar-u*
傘＝主格 忘れる-無生.結果相-非過去
傘が忘れてある

(作例)

この格体制の変換現象は、直接目的語が主語に昇格すること、他動詞文の主語に対応する要素を斜格を用いても表せないという二つの観点から、いわゆる逆使役構文 (木部編 2019 : 46) に該当する例であるといえる。ただし、その典型的なものではない。佐々木 (2007) など一連の方言研究においては、日本語方言の逆使役の研究は、主として「自発述語の 1 つの用法として逆使役を持つ (木部編 2019 : 46) 」と記述されてきているが *-tar-* には自発の用法はない。*-tar-* が示すところは、主題の名詞句の指示対象が無生物であるという点であって、その性質上、他動詞においては目的語となることが多い。従って、主題である名詞句が *-tar-* に先行する他動詞の主語にはなにくく、上述のように格体制に変換が生じることとなる。このような強い共起制限は *-tar-* が存在動詞の *ar-* の有生物とのみ共起する性質を継承していることによると考えられる。諸方言の逆使役構文との比較対照などの詳細については、本稿の範囲を超えるので今後の課題としたい。

2.3 湖北方言におけるアスペクト接辞としての *-tar-* の位置付け

これまで見てきた *-tar-* が後続できる動詞のタイプを表 1 にまとめる。

表 1 無生物と共起する *-tar-* が後続できる動詞のタイプ¹¹

	動詞	方言動詞語幹	意思性	限界性	相	格変換	用例（共通語動詞語幹）	<i>-tar-</i> の 接続	共通語接辞の接続	
									<i>-te-(i)-r-</i>	<i>-te-ar-</i>
自動詞	違う	tigo-	なし	非限界	状態	なし	(名前が)tiga(w)-Q-	○	?	×
	落ちる	oQ-	なし	限界	結果	なし	(葉が)oti-	○	○	×
	落ちる	oQ-	なし	限界	進行	なし	(葉が)oti-	○	○	×
	流れる	nagare-	なし	非限界	結果	なし	(川が)nagare-	○	○	×
	降る	huQ-	なし	非限界	進行	なし	(雨が)hu(r)-Q-	○	○	×
	走る	hasi(r)-Q	なし	非限界	進行	なし	(車が)hasi(r)-Q-	○	○	×
	走る	hasi(r)-Q	あり	非限界	進行	なし	(人が)hasi(r)-Q-	×	○	×
他動詞	忘れる	wasure-	なし	非限界	結果	なし	(傘を)wasure-	○	○	?
	忘れる	wasure-	なし	非限界	結果	あり	(傘が)wasure-	○	×	○
	開ける	ake-	あり	限界	結果	なし	(ドアを)ake-	○	○	○
	開ける	ake-	あり	限界	結果	あり	(ドアが)ake-	○	×	○
	沸かす	wakasi-	あり	限界	進行	なし	(湯を)wakas-i-	○	○	○
	沸かす	wakasi-	あり	限界	進行	あり	(湯が)wakas-i-	○	×	○
	洗う	aro-	あり	非限界	結果	なし	(服を)ara(w)-Q-	○	○	○
	洗う	aro-	あり	非限界	結果	あり	(服が)ara(w)-Q-	○	×	○
	回す	mawasi-	あり	非限界	進行	なし	(コマを)mawas-(i)-	○	○	○
	回す	mawasi-	あり	非限界	進行	あり	(コマが)mawas-(i)-	○	×	○

用例に使用した名詞句の指示対象は、意思性をもつ自動詞の場合を除き全て無生物である。この名詞句を有生物に入れ替えると *-tar-* が接続する形式は、先に述べた状態動詞のような例外を除き、全て非文になる。意思性をもつ自動詞は、1 つしかない項の指示対象がほぼ有生物でしかあり得ない¹²ため、*-tar-* が後続することはできない。表の右端は、*-tar-* が後続する動詞が共通語の *-te-(i)-r-* か *-te-ar-* のいずれに対応するかを示す。これを見ると、*-tar-* は、歴史的にも形態的にも *-te-ar-* に対応する形式であるが、その機能がカバーする範囲は、無生物を主題とする限り *-te-(i)-r-* と *-te-ar-* にまたがることになる。 *-tar-* は、状態動詞を含む自動詞、他動詞、限界動詞、非限界動詞のいずれにも後続し、状態や属性、進行相、結果相を表すことができる。換言すれば、湖北方言の *-tar-u* は語彙資源とする存在動詞の *ar-* の有生物と共起する性質を引き継いで、名詞句との間に強い共起制限を持つと同時に、先行する動詞についてはタイプを選ばないことを示している。先行することができる動詞の範囲は、共通語の *-te-ar-* が後続できる範囲よりもはるかに広い。

京阪方言の *-taRr-u* については、金水 (2006) の記述による限り、湖北方言に近い状況から有生性の共起制限を失う方向に文法化が進んでいると考えられる。

このことは、工藤 (1995) 以降の一連の研究において「準アスペクト」ないし「二次的なアスペクト形式」と位置付けられてきた *-te-ar-u* に対応する形式が、少なくとも

¹¹ 共通語の文法性判断については、共通語に近い東京方言話者 2 名の協力を得ました。

¹² ロボットや AI の場合は、筆者の内省では擬人化が行われるので可能になるかもしれない。

も湖北方言に関する限り、これを二次的な位置付けに留めることはできないことを意味している。たとえば工藤 (2014) は「標準語の『してある』形式は、『死んである』『壊れてある』『鳴ってある』とは言えず、すべての動詞を捉えていないことから、文法化の進んだ中心的なアスペクト形式とは認めがたい」(p.486) としているが、*-te-ar-u* に対応する湖北方言の *-tar-u* は、これらの全ての動詞に後続する。もちろん、無生物が主体であるから通常は「死ぬ」には後続しないのであるが、現代語では共通語でもメタファー的に「システムが死んでいる」「電波が死んでいる」などの言い方が日常的に為されており、湖北方言ではこれを *siN-dar-u* ということができる。

とはいえ、この方言において *-tar-u* が「中心的なアスペクト」と言えるわけではないことは、*-tar-u* が有生の主題とは共起できないことから明らかである。有生物を主題とする文の動詞に後続するアスペクト接辞については、湖北方言にはそもそも語彙資源である存在動詞に、人称、待遇に関わる共起制限がある (脇坂 2016)。アスペクト形式もこれに準じる共起制限を持っていることから、先に述べたように、二項対立に還元できる無生物と共起する体系よりも複雑で、証拠性やモーダルな意味なども合わせて、別途記述する必要がある。詳細については機会を改めることとしたいが、主題が有生なのか無生なのかによってアスペクト形式の共起制限とそのふるまいが大きく異なるために、現時点で湖北方言の共時的な記述を行う限りにおいては、どの形式が「中心的」であるかという問題を提起することは困難であるといえるだろう。

3 *-tar-u* から共通語 *-te-ar-u* への有生性の共起制限の転移

湖北方言の話者には、方言形の *-tar-u* にかかる有生性の共起制限をそのまま共通語の *-te-ar-u* に転用する傾向が見られる。例えば、(17)、(18) のように共通語では通常許容されない、あるいはされにくい形式を共通語として使う。「気がつきにくい方言」(沖 1999)「気付かない方言」(木部編 2019) などと呼ばれる現象の一形態と考えられる。以下の例は、方言形式ではなく方言話者が共通語として使用する形式なので、かな表記とする。

(17) ごみが出てあります。

(18) 財布が落としてあった。

(18)-(19) (作例)

(17) は「出る」という自動詞が使われているが、ごみが自動詞の主体として勝手に出たのではなく、共通語の「出ている」と同様に、出してある状態を指して「出てあ

る」と言っている。(18) では、既に見たように動詞の意思性は問われないため、誰かが財布を意図的に落としたというニュアンスではなく、単に財布が落ちていた状況の描写である。このような現象の特徴として、

a) 対応する方言形式そのものは転移しない。話者には「*-tar-u* に対応する共通語としての *-te-ar-u* の使用」という認識があり、レジスターとしての共通語を話す場合にのみ現れる

b) 個々の用例ではなく「有生性という文法範疇が、アスペクト形式に関与する」という現象全体が方言話者の共通語に転移する

c) 個々の用例を見るだけでは観察できず、話者にとって気づきにくい、変化しにくい

d) 共通語のインプットの頻度が高い使用例 (雨が降っている、など) については転移しないものもあり、個人差、年代差が大きい

などが挙げられる。これらの例は、方言が一方的に共通語に影響されるだけでなく、「共通語」の形成に方言の性質が影響を与えることを示すものであり、方言話者の共通語の形成の過程を観察する上で重要な視点を提供する事例であると考えられる。

4 結論

本稿では、共通語の *-te-ar-u* 形式にあたる *-tar-u* 形式について概観した。*-tar-u* は存在動詞の *ar-u* を語彙資源とするアスペクト接辞で、この *ar-u* の性質を継承して、主題の名詞句との間に有生性に関する強い共起制限をもち、無生物と共起する。その一方で先行する動詞のタイプには、名詞句の有生性の制約から生じるものを除いては、ほとんど制限がなく、共通語や現代の京阪方言と比べて、極めて広い範囲をカバーし、共通語では *te-(i)-ru* 形式が担う機能や、共通語には見られない性質も担っている。これは金水 (2006) などが提示する存在動詞からアスペクト形式への文法化の発達過程について、古い形式を残す方言としてデータを示し、これを支持するものである。またこの形式に見られる共起制限は、この方言話者の共通語の習得に干渉し、影響を与えている。

本稿では、データに基づいてこれらの言語事実を示したが、多くの点で課題が残っている。第一にこの方言の文法記述、特に存在動詞とアスペクト接辞については、本稿でとりあげた無生物と共起する *-tar-u* の記述はごく一部に過ぎない。総合的な文法記述を進めた上で、この方言の体系の中に位置付ける必要がある。第二に2節で取り上げた逆使役構文については、佐々木 (2007) など一連の方言研究において提示される類型論的な枠組みに照らして、他の方言との関連も参照しながらさらに記述を進め

たい。

本稿で取り上げた有生性の共起制限について、この方言に古い形式が保存されているとするならば、アスペクト接辞の人称制限や待遇関係の表示など、他の領域についてもなんらかの言語事実を継承している可能性がある。通時的な研究に資することも視野に入れてさらに分析と記述を進めたい。

参考文献

- 生田早苗 (1951)「近畿アクセント圏境界地区の諸アクセントについて」寺川喜四男・金田一春彦・稲垣正幸 (編) (1951)『國語アクセント論叢』255-346. 東京：法政大学出版局.
- 井之口有一 (1952)『滋賀縣言語の調査と対策：方言調査編』彦根：井之口有一 (私家版) .
- 沖裕子 (1999)「気がつきにくい方言 (地域方言と社会方言) -- (地域方言とその周辺) 」『日本語学』18 (13) : 156-165.
- 寛大城 (1962)「滋賀県方言」榎垣実 (編)『近畿方言の総合的研究』159-217. 東京：三省堂.
- 木部暢子編 (2019)『明解方言学辞典』東京：三省堂.
- 金水敏 (1995)「「進行態」とはなにか」『国文学の解釈と鑑賞』60 (7) : 14-20.
- 金水敏 (2006)『日本語存在表現の歴史』東京：ひつじ書房.
- 工藤真由美 (1995)『アスペクト・テンス体型とテキスト—現代日本語の時間の表現—』東京：ひつじ書房.
- 工藤真由美 (2014)『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』東京：ひつじ書房.
- 佐々木冠 (2007)「北海道方言における形態的逆使役の成立条件」角田三枝・佐々木冠・塩谷亨(編)『他動性の通言語的研究』259-270. 東京：くろしお出版.
- 下地 理則 (2018)『南琉球宮古語伊良部島方言』東京：くろしお出版.
- 坪井美樹 (1976)「近世のテアルとテイル」『佐伯梅友博士喜寿記念 国語学論集』537-60. 東京：表現社.
- 中井幸比古 (2008)「京都方言の形態・文法・音韻 (1) —会話録音を資料として (1) 」『方言・音声研究』1 : 9-200.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992)『基礎日本語文法・改訂版』東京：くろしお出版.
- 松丸真大 (2018)「滋賀県の方言概説」真田信治監修『関西弁事典』64-73. 東京：ひつじ書房.
- 脇坂美和子 (2015)「滋賀県湖北方言の動詞に付く助詞と接辞のアクセントについて」

『京都大学言語学研究』 34: 69-88.

脇坂美和子 (2016a) 「滋賀県湖北北部方言の命令形式について」『言語記述論集』 8 : 129-146.

脇坂美和子 (2016b) 「滋賀県湖北方言の存在動詞と名詞句階層・アスペクト・待遇範疇」日本言語学会第 153 回大会口頭発表. 福岡大学. 2016 年 12 月 3 日.

脇坂美和子 (2019) 「滋賀県湖北方言の -tar-u 形式の有生性とアスペクト」日本言語学会第 159 回大会口頭発表. 名古屋学院大学. 2019 年 11 月 16 日.

A study on the suffix *-tar-* in the Japanese Kohoku dialect — its animacy co-occurrence restrictions and aspectual behaviors

Miwako Wakizaka

Abstract

This paper aims to show the fact that (1) the verbal suffix *-tar-*, which represents the aspectual meanings in the Kohoku dialect, has strong animacy co-occurrence restrictions with its topic nouns, i.e., only co-occurs with non-animate nouns and (2) because of its high productivity, we can no longer regard the suffix as "secondary" in the dialect.

The restriction originates from the feature of the lexifier *ar-u*, which is the existence verb in the dialect as well as other dialects in Japanese. Contrastively, as previous studies show, the *-te-ar-* in standard Japanese and the *-taRr-* in the Keihan dialect, which are the counterparts of *-tar-*, have gradually grammaticalized and lost this restriction. Additionally, the suffix *-tar-* follows almost all verbs whereas *-te-ar-* and *taRr-* only follow a limited number of verbs in modern Japanese. Because of the lower productivity, these suffixes have been regarded as the "secondary" or "sub" aspect markers in the Japanese aspect system.

In this paper, I will provide a precise description of the suffix *-tar-* so that it supports the hypothetical theory of the grammaticalization of the aspect markers. In addition, I will argue that unlike the counterparts in standard Japanese and the Keihan dialect, *-tar-* has not lost its features and productivity, that is, it plays an important role in the aspect system of the Kohoku dialect. I will also refer to the fact that some speakers of the Kohoku dialect tend to transfer this feature of *-tar-* to *-te-ar-* when they speak standard Japanese. This is an example of how a dialect speaker can apply the features of their dialect to the standard variety.

受領日：2019年10月14日
受理日：2019年12月26日